

コミュニティ活動研究会 活動記録 (2016年度)	
活動名	区民ひろば シニア変身講座
報告者氏名(期)	坂田博久(5期)
他参加者	講座参加者: 24名(男性2名、女性22名) スタッフ: <講師>坪野谷雅之先生・堀本恵子(6期) <モデル>蔵持・吉田・村田(6期) <サポート>高田(8期)・河合(9期)・坂田(5期)・山中(堀本さんの生徒)
参加日時	9月24日(土曜) 10:00から12:00
場所	区民ひろば豊成 (豊島区上池袋1-28-7)
活動の経緯	<p>2014年度、豊島区区民ひろば課が始めたプラチナ社会共創事業の一環で、RSSCも提携した。コミ研としてシニアの社会参加、区民ひろばへの参加を促すことを目的とした「シニア変身講座」を企画提供してきた。3年目に入り、22ヶ所ある区民ひろばの内、今回で9ヶ所目の実施となる。回を追うごとに参加者も増え盛況となってきている。</p> <p>9時からスタッフ全員で会場の設営準備。カジュアル・エレガント・ワイルド・モダンの4つの島を作り、それに見合うスカーフやアクセサリなどの小物を配置した。</p> <p>第一部 講演「多世代交流によるコミュニティ創り」 30分 講師: 坪野谷雅之先生</p> <p>第二部 ファッション編 ファッションの理論と実演 90分 講師: 堀本恵子(6期) 国際カラーデザインマスター</p>
感想	<p>受講者は70歳代から最高90歳まで。</p> <p>第一部の坪野谷先生の講義は、いつもながら大変ユーモアに溢れた話しぶりで、『一日一回、「ありがとう」と相手の顔を見て言う事がみんなを幸せにする』など、みんな納得して聞き入っていた。最後には積極的な区民ひろばの利用が、自分自身の生きがいや地域の活性化に繋がることで話を締めくくった。</p> <p>第二部の堀本さんの講義は、自分の顔色と似合う色合いの話から初め、各種のファッション理論の基本を講習した。その後、6期生の専属モデルの出番だ。グレー系とベージュ系の着こなしをした2名の女性専属モデルを順次前にだし、小物を使ってどのように変身していくかを実演してみせた。男性モデルには、シャツの羽織り方の工夫、帽子をかぶることで一段と若返ることを見せた。</p> <p>後半は、みんなで実践だ。後ろに準備した、カジュアル・エレガント・ワイルド・モダンの4つの島の周りに集まり、小物を身に着けて自分がどのように変身していくかを楽しんだ。堀本さん初め、モデル・スタッフも受講者にアドバイスや声かけをして一緒に楽しんだ。「早く写真撮って」、「ファッションモデルになったよう」とあちらこちらから歓喜の声があがった。会場は笑顔に溢れていた。</p> <p><スタッフ参加者: 河合玉美さん(9期)の感想> 「私、もう80過ぎてるのよ…。」「スカーフの巻き方、わからないわ。」</p>

「イヤリングつけたの初めて。」などと、みなさん最初は少し戸惑い気味でしたが、スカーフ・ネックレス・イヤリングと組み合わせるにつれ、どんどん表情が明るく晴れやかに若々しくなっていきました。

私が思わず「よくお似合いですよ。」と言うと「ありがとう。」とニコリ。

たくさんのステキな笑顔に出会えて、本当に「幸せなひととき」でした。

お洒落を楽しもうとする気持ち、若さの秘訣だと思いました。

<スタッフ参加：高田佳雄さん（8期）からの感想>

曇り空の9月24日(土)、池袋で行われた「シニア変身講座」にスタッフの一員として参加した。今回で2回目の参加である。この「シニア変身講座」のネーミングに当初、戸惑ってしまった。「シニア変身講座？一体、どんなことやるの？まさかシニアがウルトラマンに変身するわけでもあるまいし？」

しかし参加してみると、意外と楽しいものである。この講座、第1部の坪野谷先生の講演の後、参加者が思い思いの「おしゃれ」を試みるものである。今回の参加者は、総勢20名程。その9割が女性である。シニアの女性のみなさんの話を聞いていると、まるで女子高生に戻った感じで話が尽きることが無い。(なお私は、高校3年間、男子校で過ごし、女子から隔離生活を送っていたので女子高の雰囲気はわからない。念のため。)

予め私たちが用意した小物を身に付け、大鏡の前で自分の姿を映し出し、にっこりする姿は何とも微笑ましい。「これ、似合うわよ！」とお互いがお互いに話しかける姿は、まさに「コミュニティ」の原点を見ているようであった。

この会に参加して、気になることがあった。それは、「男性の参加者がほとんどいない。」ということだ。今回も最後まで参加されていた男性は1人のみである。坪野谷先生が、「これからのシニアは「きょうよう(=今日、用がある。）」、「きょういく(=今日、行くところがある。）」が必要だと話されていた。

この「きょうよう」と「きょういく」がないと、最終的には社会から孤立していく道を歩むことになる。これを防ぐためにも、健康が許す限り、「自ら足を運んで、人とのコミュニティを図り、微笑みを提供することが必要だ。」ということを感じた1日であった。

